

9/21 SAT. 22 SUN.

ヨハネス・ブラームス(1833 ~ 1897)

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品77

この作品は、1878年ブラームスが45歳の時、創造意欲みなぎる円熟期に作曲された。ブラームスは、1877年から1879年までの3度の夏をオーストリアの避暑地ペルチャッハで過ごし、この作品が書かれた1878年に彼は、《ヴァイオリン・ソナタ第1番「雨の歌」》や《大学祝典序曲》、《ピアノ協奏曲第2番》などにほぼ同時期に着手している。彼はスケルツォを含む4楽章から成るヴァイオリン協奏曲の構想を抱いていたがヴァイオリニスト、ヨアヒムからの助言もありスケルツォ楽章は省かれ、ブラームスは「4楽章構成」をピアノ協奏曲第2番で実現することになる。

ブラームスはこの協奏曲の作曲にあたりベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》だけではなく《交響曲第3番》からも示唆を得ていたと考えられている。さらにヴァイオリン協奏曲のヴィルトゥオーソ的な表現法の点で、ヨアヒムのヴァイオリン協奏曲をも研究したとみられ、とくに重音の表現などで共通性がみられる。作曲にあたり、ヨアヒムがとくにヴァイオリン独特の表現法などの点でブラームスに細かな指導や助言を行っている。また、第3楽章についてはブルッフの《ヴァイオリン協奏曲第1番》との関連も注目されている。

第1楽章 (アレグロ・ノン・トロッポ 二長調、4分の3拍子) はオーケストラの伸びやかな分散和音で開始する。ヴァイオリンは二短調のエネルギッシュなカデンツァ的な楽想で登場する。

第2楽章 (アダージョ ヘ長調、4分の2拍子) オーボエが奏する美しい主題で開始する。その後独奏ヴァイオリンがアリアのような憧れと内なる情熱をこめた主題を奏する。

第3楽章 (アレグロ・ジョコーゾ - マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ 二長調、4分の2拍子) は、ハンガリー舞曲を思わせる躍動感に満ちたフィナーレで、自在に口短調やト長調、イ長調などの調を横断してさまざまな表情の楽想が繰り出されて、最後は力強く締めくくられる。

西原稔 TEXT by Minoru Nishihara

作曲：1878年

初演：1879年1月1日 独奏ヨーゼフ・ヨアヒム、ブラームス指揮、ゲヴァントハウス・ホールでの演奏会(演奏団体名不詳) 献呈ヨアヒム

編成：独奏ヴァイオリン、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦5部

セルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)

交響曲 第4番 ハ長調 作品112

祖国ロシアの革命の混乱を逃れ、1918年から欧米で暮らしていたプロコフィエフは1930年、ボストン交響楽団の創立50周年記念の委嘱作品として交響曲第4番作品“47”を書き上げた。ロシア・バレエ団を率いるディアギレフから委嘱を受けて前々年に作曲したバレエ音楽《放蕩息子》から、いくつかの素材を転用して発展させたもので、小規模ながら、新古典主義的な側面と鮮烈な響きを兼ね備えた、魅力的な交響曲だった。しかしこの作品は、初演時もソ連を含む世界各地での再演時も、決まって冷淡に扱われた。

それから17年後の1947年、ソヴィエト連邦に居を定めてはや10年が経ち、交響曲第5番(1944)を大成功させ、第6番の作曲に取り掛かっていたプロコフィエフは、「交響曲第4番は、全体的な構造の点から、もう少し力強いものにできるのではないだろうか」と考え、再びこの不遇の作品を見つめなおし、改訂を加えることにした。作業の結果、交響曲の規模は2倍近くに増し、楽器編成は増強され、それぞれの素材は新たな展開を与えられ、楽章内・楽章間の有機的な結びつきも強められた。「実質的に私の《交響曲第7番》と呼べます」と語り、新たな作品番号“112”を与えるほどの改訂の出来栄に、作曲家自身も自信を持ち、大いに満足したようだ。しかし、1948年にソヴィエト楽壇にいわゆる「ジダーノフ批判」が勃発する。ショスタコーヴィチやプロコフィエフなど、何人かの作曲家が名指しされ、作風の「形式主義的・反国民的」側面を糾弾された事件である。その結果、彼のいくつかの作品は演奏禁止の憂き目にあった。本作品もその煽りを食い、作曲家の生前には演奏会初演が行われず、コンサートホールでの演奏は、改訂完了から10年後、1957年を待たなければならなかった。

第1楽章 アンダンテ - アレグロ・エロイコ ハ長調

鷹揚でスケールの大きい序奏が楽曲の幕を開ける。この楽想は第2、4楽章でも現れ、楽章間を結びつける役割を果たしている。序奏が終わると、いわゆる「アルベルティ・バス」(古典派音楽から典型的な伴奏音型)に導かれ、英雄的で闊達な第一主題が始まる。ト長調の第二主題ではがらりと速度・拍子が変わり、フルートとクラリネットの独奏によって奏でられる旋律には、穏やかで牧歌的な雰囲気漂う。展開部では序奏と各主題の要素が入り混じって進行し、交響曲全体の基調音とも言えるハ音の強奏によってボルテージが最高潮に達する。

第2楽章 アンダンテ・トランクイロ ハ長調

歌心に満ちながらも、ドラマチックな構成をもつ緩徐楽章。ゆるやかなアルベルティ・バスの導入に続き、フルート、続いて弦楽器による叙情的な旋律が現れる。転調を繰り返す推移的部分は、時計の刻みのような音型が印象的。嬰ト短調の不安げな副次主題を経て、冒頭旋律が様々な調で展開されたかと思うと、悠々とした第1楽章の序奏が回顧される。その後、冒頭主題の再現によって楽章はクライマックスを迎える。

9/21 SAT. 22 SUN.

第3楽章 モデラート、クアジ・アレグレット 口短調

スケルツォ楽章。初版ではバレエ《放蕩息子》の第3曲(美女)をほぼそのまま用いた楽章だったが、改訂にあたり、導入部、結尾、新たな推移的素材を取り入れてスケールを拡大し、交響曲独自の音世界を構築している。弦と木管楽器で提示される主題旋律はどこか蠱惑的で、エネルギーで朗らかな短い副次部分と見事に対比されている。冒頭主題は再現の度に、音型の装飾やそれぞれの楽器の組み合わせが細やかに変化し、作曲者が繊細に編み上げた音色のあやが感じられる。

第4楽章 アレグロ・リゾルト ハ長調

プロコフィエフは、交響曲初版のソナタ形式に基づく最終楽章を徹底的に構築しなおし、様々な要素が入り乱れる構造へと変容させた。ピチカート弦、スタッカート管楽器・ピアノを主とする力強い冒頭主題は、急速なトッカータ的箇所と組み合わせられ、鮮烈な印象を残す。以上のような楽想が、ときに柔らかい旋律を支える伴奏となり、ときに主役として前面に現れる。拍子が変わり、変ホ長調で木管楽器によって奏でられる楽しいで暢気な主題は、中間部の役割を果たす。冒頭主題が短く再現されたのち、その雰囲気を保ったまま一層活き活きとしたコーダに突入すると、クライマックスで第1楽章の序奏の一部が金管の伴奏を伴って堂々と回帰し、輝かしく楽曲の掉尾を飾る。

山本明尚 TEXT by Akihisa Yamamoto

作曲: 1930年 / 1947年改訂

初版初演: 1930年11月14日、パリ、セルゲイ・クセヴィーツキイ指揮ボストン交響楽団

改訂版放送初演: 1950年3月11日、エイドリアン・ポルト指揮BBC交響楽団(演奏会初演: 1957年1月5日、モスクワ、ロジェストヴェンスキー指揮ソヴィエト国立交響楽団)

編成: ピッコロ1、フルート2、オーボエ 2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット 2、小クラリネット1、バスクラリネット1、ファゴット 2、コントラファゴット1、ホルン 4、トランペット 3、トロンボーン 3、バス・チューバ、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、タンブリン、シンバル、小太鼓、ウッドブロック、ハープ1、ピアノ1、弦5部